ネットの過剰反応による炎上の対策

宮城県仙台第三高等学校　　28 班

本研究は、現代社会で急速に進む『情報化』によって発生した『炎上』という新たな社会問題への原因究明とその対策を考え、それを伝えることで炎上が減少するのを目的として行った。主に三高生を対象とした実験的アンケートや、データの統計、また、それらの調べたことを伝える場として、中学校への出前授業を行った。結果として自分たちなりの炎上が起こる原因をまとめ、それらを発信するという目的は達成できたが、炎上の原因というのは、多くの原因があり自分たちが今回考えなかった視点からの意見も取り入れる必要があると感じた。

キーワード：過剰反応　匿名性　同調圧力

Ⅰ．はじめに

近年、新たな社会問題として浮上している「炎上」は、インターネットの急速な普及により有名人から一般人どんな人でも些細な発言や、誤解を招くような発言で簡単に発生する非常に現代人にとって身近であるにも関わらず、危険性がとても高い社会問題である。炎上の怖さというのは一度炎上してしまうと、とても酷い誹謗中傷を浴び心に深い傷を負ってしまったり、自分の個人情報がネット上に晒されてしまうことだ。また最悪の場合、社会復帰が厳しくなってしまったり、誹謗中傷に耐えられなくなった人が自殺をするまで追い込まれてしまうというのも残念ながら多くある。これらが発生する原因として、炎上する側と誹謗中傷をする側、また SNS のシステム自体にも問題があると私達は考えた。そしてそれらの原因を自分たちなりにまとめ、その原因と現在の社会や、インターネット、また日本人の性格などと絡めながら対策をする必要があると考えた。

Ⅱ．研究方法

主に、先行研究によってわかった情報から、匿名性と、過剰反応、同調圧力の分野に関してそれぞれ仮説を立てて調べた。

ⅰ）過剰反応と匿名性について

過剰反応による炎上が発生するのは、ネット上に実名がでない匿名性というシステムが関連しているのではないかという仮説をたてた。そこでそれらの関連性を調べるために、三高生に対してアンケートを行った。アンケートの概要は、匿名のアンケートと、記名のアンケートに分け、

ある SNS での投稿（※創作）に対して口調の変化や意見の変化が匿名性と記名性において実際に発生するのかを調べた。投稿の内容は下のような投稿に対して自由にコメントを返すような形にした。

※使った投稿（創作）

有名人 A さんが、番組で共演している大御所 B さんが新型コロナウイルスに感染してしまったときに発言したツイート

A さん「えーっと…私は一ヶ月は会っていないので大丈夫です…」

このツイートに返信するような形でコメントしてください。

ⅱ）同調圧力について

SNS 上の批判のコメントなどを見たときに、自分も相手を批判してやろうという同調圧力が発生し、それが急速に広がることで一過性の祭りに近い騒ぎとなり炎上が発生するのではないかという仮説をたてた。そこでそれらの関連性を調べるために、まず過剰反応と匿名性のときと同じように三高生に対するアンケートを行った。今回は、ある事件（※創作）の説明の下にそれに対する他人の反応をおき、Youtube のコメント欄のようなアンケートを作成した。また、コメント欄の内容を加害者を擁護する側と被害者を擁護する側の二種類に分けた。

※使った事件（創作）

ある日の朝、Mくんが「ピアス」をつけて学校に登校してきました。それを見かけた生徒会役員Sさんは「学校ではピアスをつけてはいけません」と注意しました。
すると、Mくんは「馬鹿じゃねーの？ツイッターで炎上させるぞ」とひどい言葉で、生徒会役員Sさんに言い返しました。
その言葉に腹をたてた生徒会役員Sさんが、Mくんの頬を殴りました。その結果、Mくんは口の中を切る怪我を負いました。
翌日、その様子を写した動画が、「他の生徒」によりSNS上で拡散されました。

※被害者擁護のコメント

Aさん：いや、なぐっちゃだめだろ
👍985　👎54

Bさん：暴力生徒会役員を取り締まる人はいないのでしょうか
👍236　👎13

Cさん：こんな生徒会役員がいるような学校には行きたくないな～
👍68　👎21

※加害者擁護のコメント

Aさん：ここまでおどされたら怖くて手がでちゃうかもなー
👍1251　👎32

Bさん：Mくんの同級生に対してのこの口の利き方はありえない
👍570　👎17

Cさん：自分の非を認められず，脅しのようなことまでやってしまう，Mくんが、圧倒的におかしいと思う。
👍174　👎2

この二種類のアンケートに対する回答の内容を比べることによって同調圧力が働くことで意見が変わるというのが実際にあるのかを調べた。
また、同様の内容の実験を出前授業で出向いた2つの中学校でも少し形式を変えて行った。中学生の1クラスを3グループに分け、被害者擁護側、加害者擁護側、コメントなしの3つに分け中学生でも実際に同調圧力が働くのかを、調べた。

Ⅲ　探究内容

ⅰ）過剰反応と匿名性について

過剰反応と匿名性についてのアンケートは、投稿に対しての肯定的な意見と否定的な意見の割合に関しては匿名と記名でほとんど変わらなかったが、口調の変化という点では違いが生まれた。

※アンケートで得られた回答

（記名）

肯定：気をつけて～、良かった～

否定：Bさんの体調を気遣うべきですよ

（匿名）

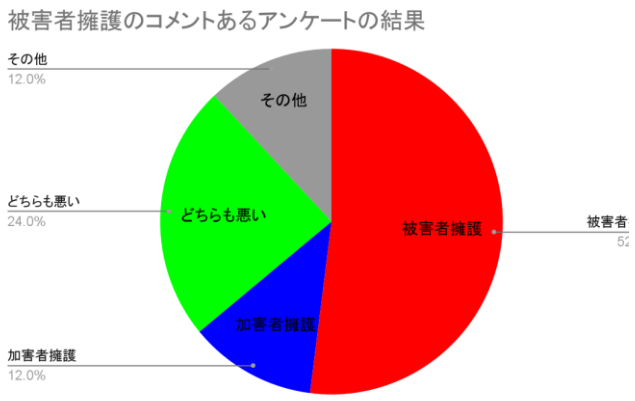
肯定：良かったね

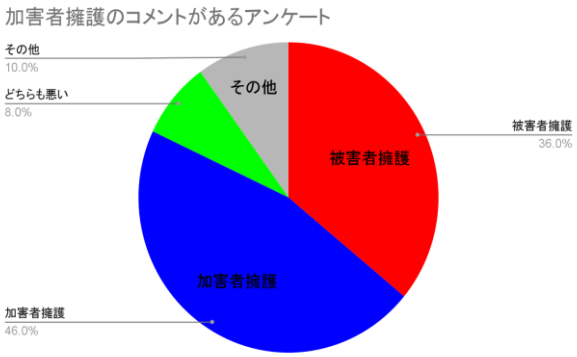
否定：知らねーよ、Bの体調は無視かよ

これは一つの例だが、このように記名のアンケートに比べて、匿名のアンケートの回答では、口調が荒くなっているコメントが、すべてではないがいくつかあるのがわかった。

ⅱ）同調圧力について

まず三高生に対して行ったアンケートに関しては、被害者擁護のコメントが書いてあるアンケートでは、被害者擁護が52%、加害者擁護が12%、どちらも悪いというが24%、その他が12%という結果になった。それに対して、加害者擁護のコメントが書いてあるアンケートでは、被害者擁護が36%、加害者擁護が46%、どちらも悪いが8%、その他が10%という結果になった。


被害者擁護のコメントあるアンケートの結果
その他
12.0%
どちらも悪い
24.0%
加害者擁護
12.0%
被害者
その他
どちらも悪い
被害者擁護
加害者擁護



これらのグラフから分かる通り三高で行ったアンケートでは、被害者擁護の割合がコメントがあるのと無いので比べたときに、明らかにある方が、被害者を擁護する意見が多くなっている。また同様に加害者擁護の割合もコメントがあるのとないので比べると、ある方が大幅に加害者を擁護する割合が高くなっている。このことから三高で行った実験では、同調圧力が働いていたと言える。

また、中学校で行った実験では、二校合わせて４クラスで実験を行ったが、すべてのクラスではなかったが多くのクラスで意見の偏りが見られた。このことから同調圧力は必ずではないが、おおくの人に働くものであると言える。

Ⅳ.考察

ｉ）過剰反応と匿名性について

今回やった実験により SNS における匿名性というのは肯定・否定の意見の分かれ方に違いは見られなかったが、口調の変化という点においては、わかりやすく変化を見ることができた。このことから、SNS での匿名性というシステムは、SNS の使用者の口調が激しくなる原因の一つであると言える。それではなぜ匿名性というのは、人の口調を悪化させるのだろうか？それは、自分の名前が出ない安全圏から他者を批判できるからであろう。相手の顔が見えないインターネット上まして名前まで出ないということになると、何を言おうと直接生身の自分が批判されるという可能性はほとんど０に近い。そのため相手を誹謗中傷しやすい環境であると SNS は言える。また誹謗中傷が起こりやすい環境になることで、些細な問題に対して過剰な反応をする人々が増え、冷静な判断ができなくなり、炎上が発生しているのではないだろうか。匿名性というのは自身の個人情報を守り、安全にインターネットを使用するために必要なシステムであると言えるが、過剰な反応や誹謗中傷が発生する原因の一つでありそれが炎上が発生する原因となっているのも今回の実験から推測ができる。

ⅱ）同調圧力について

同調圧力についてはアンケートによる実験と、前に行った出前授業における実験において必ずとは言えないが同調圧力による意見の偏りというのが見ることができた。このことからインターネット上においても同様なことがすくなからず起きていると言える。なので、同調圧力も一つの炎上の原因と言えるだろう。それではなぜ同調圧力は発生するのだろうか？それは日本人の性格にも関係しているのではないだろうかと考える。例えば、コロナウイルスの感染が弱まりマスクの制限がなくなったとき、すぐに国民みんなが外すこともなく、多くの人がマスクを外すようになったのは条例が出されてからしばらくしてからであったと思う。その理由として、周りがまだマスクをつけているから自分もまだつけておかなくてはいけないという同調圧力のせいでなかなか外すことができない人が多かったそうだ。このように日本人が周りに合わせることを重視していたり、周りに合わせていない人を悪とする風潮が日本にはあるのだと思う。だからそれはインターネット上でもよく発生し、周りが叩いているから自分も叩いていいだろうと自分があまり調べていなかったり無知な事柄であったとしても、表面上の批判だけを見た人々が、自身の自己満の正義感から、意見を偏らせてしまうのだと思う。そしてそれは非常に止めることが難しくそのままどんどん広がっていくため最終的には炎上が発生してしまうのであろう。

Ⅴ.まとめ

私達は探究を通してなぜネットでは過剰な反応による炎上が発生してしまうのかを調べ、匿名性や、同調圧力というのがネット上での過剰反応を引き起こしていると考えたが、これら以外にも多く炎上が発生する要因となることはあるのだと思う。さらに今回でた要因の対策というのも、SNS そのもののシステムであった

り、一人ひとりの意識によって変わるものが多くあるため、対策はとても難しいものだろう。そのため私達は、中学校への出前授業を通して中学生に今回探究で調べた炎上の原因や、SNSの利用方法について少しでも伝わるように授業を行った。私はこのように直接伝えていくような行動を続けていくことでしか、炎上や誹謗中傷の対策というのはないのだと今回の探究を通して学んだ。
インターネット上というのは、何が正解かわからない世界で、根拠のないことで誹謗中傷を浴びてしまったり、些細なことで真実を捻じ曲げられ、批判されそれが広まり炎上がおきてしまうこともある。しかし一人ひとりが優しい言葉を使う用になったり、同調圧力に流されず、自分の意見をしっかり持つことができれば炎上を減少させることができるのではないだろうか。

参考文献

・https://toyokeizai.ne170133
https://www.comnico.jp/we-love-social/sns-users

https://psych.doshisha.ac.jp/